

永幡祥子

媒染

小さなさかなの住む池に
しずかに流れていく川に
息をひそめる湖に
大きくうねっている海に

銀の翼からたっぷり金の粉をこぼして
彼はまっすぐ降りてくる
空を紺に染め ゆっくりゆっくり冷えてゆく

家路をいそぐ朝焼けの中を
つとめに向かう夕焼けの中を
晩飯が待つ畑の中を
黙って見ているビルの中を

ぽっかりのんびりしたような顔で
彼女は中空に浮いている
誰とでも一緒に歩き どこまでもついてゆく